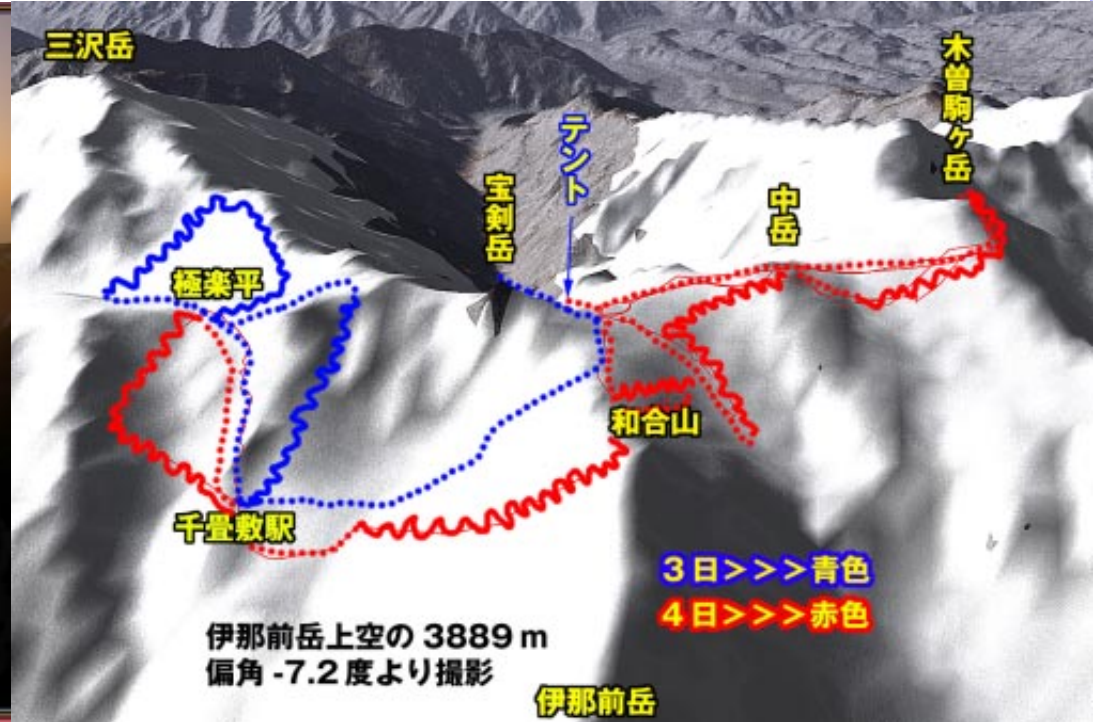


GW 5/3 ~ 4 Central Alps



天狗岳とアーベンルート



日時 > 5/3-4



2005.GW 中央AL
天候 > 二日とも快晴



メンバー > 大塚・大本



このままでは2005GWの山スキーのフィナーレが消化不良に終わってしまうので、天気予報を調べると中盤の3~4日が最もよさそうなので速攻で滑れる中央アルプスに照準を合わせることにした。

急遽決めた計画なのでメンバーは大本と私の二人だけ、他のメンバーは里帰りや私用に参加不可能である。

3日 快晴 宝剣キャンプ

千畳敷----極楽平~~~三沢カール----極楽平/小宝剣ノド~~~千畳敷----千畳敷カール----宝剣岳スタカット climb---宝剣キャンプ



フル装備に身を固めて出陣

と思われる。

宝剣岳を取り囲む急峻な岩稜帯が真っ白の千畳敷から黒くそびえ立ち、真っ青な空に抜きんでている姿は誰もが圧倒される光景であろう。



極楽平を登る

後ろは4日の和合山ルート

姫路を3時発で千畳敷駅2614 mに着いたのが9時半。今年の正月に来た時よりも雪は多いところもあれば少ない所もあるように見受けられる。パトロール隊に聞くとやはり雪解けが早いそうである。ホテル横の鳥居もほとんどが見えている状態である。いつもよりは1.5 mは少ないであろう

この時期にその光景を見るがために早くから観光客でにぎわっている。

始発ロープウェイでの登山者数人パーティが、我々が正月アタックした和合山2911 m目指して登っている。山スキーヤーは5-6人ほどか。極楽平と千畳敷カールに分かれてシール登行している。

いつものことながら、こ

の千畳敷は一気に2600 mまで運んでくれるのでそのまま行動すれば必ず息たえだけになること必至なのでゆっくりとお茶を飲みながら景色を堪能する。

今日の行程の極楽平2850 mを見上げると2人がシールで登っている。

雲一つない青空にさんさんと太陽が降りそそぎ照り返しも強烈である。

Tシャツ一枚で登り始める。先行のスキーヤーはコース取りが悪いので我々が登り詰める頃には追いついてしまった。彼らはこのまま滑って帰るとのことであったが、バス・ロープウェイで3800円も支払っているのになんとももったいない事であろうか。

稜線から三沢岳2846 m方面を見るとやはり雪が少ない西斜面はハイマツがたくさん顔を出しているではないか!、また三



三沢岳



三ノ沢カールを滑る大本



喉元からドロップイン



千畳敷の登り



宝剣岳のスタカットピレー



8環で一気に下降する大本

沢岳の素晴らしい斜面もダケカンバがうるさそうで、どうもよくない。よく見ると三沢稜線の2700m地点の斜面が下まで続いているように見えるので早速にトラバース体制に入って、雪尻直下から一気にドロップして行く。雪質もザラメで申し分なしで快適ターンを切ってアツという間に2500m地点の溜まりまで降りてしまう。そこから先もまだ滑れそうだが今回は常においしい箇所だけをつまみ食いなのでそそくさと登り返す。

稜線に辿り着くと全くもって誰も登って来ていない??。

極楽平は明日にとっておくことにする、千畳敷ホテル前から見ていると宝剣岳の左の急峻な岩溝に雪がピッシリと付いているのを確認していたので、その地点を探しに稜線歩きをする。

確認地点から見下ろすと出だしはとんでもない急で壁のようになっている。しかし雪も緩んできているので、気合いを入れて「さぁ、行きますかっ!」最初の出だしは横滑りで体制を維持するがストックのピックが雪壁につくほどでスキー雪崩れを起こしている。それをこなすとすぐさま横割れクラックだ、ここは横滑りは出来ないので一気にカッ飛びターンを切ってノド元を通過した。途中で次方の大本を待っ

ていたが、雪まくりのような小さな雪崩れがどんどん落ちてくるので一気に千畳敷まで滑り込んだ。後ろを見ると大本も快適なターンを切ってカッ飛んできていた。お互いに緊張の糸が切れて息荒く「ハアハアゼゼイ」であった。

腹が減ったと思いや時間も12時を回っていたが、ギャラリー多数の千畳敷ホテル前で小休止も嫌なので、千畳敷カール真下まで行きパンを頬張る。さぁ炭水化物を詰め込んだら今日最後のメインの千畳敷カールの登りである。

オットセイ岩までシールで登り、アイゼン&引っ張りで乗越浄土まで息せき切らしながら登り、宝剣山荘手前でテント設営、辺りには二張り。テント設営を済ますと早速に雪上テーブル作りと大忙しだ。でもなぜか回りのテントはこもったままである。夜の準備も万端に出来たので、「さぁ、宝剣岳2931mに登りますか」とザイルを身に付けて取り付け地点へ行くと、な、な、なんと、監視員が3人も見張っているではないか!、「登攀用具のないパーティは登ってはいけない」と言うしまつである「なんでやねん?、お前の山でもあるまいし、全ては自己責任やるが」と言ってもノーコメントである。昨年末に親子がコ



幻想的な光景



テン場にて



朝一にクトーが食いつく

ンティニアスで登攀していて二人共滑落死しているから厳しくなつたと言っていた。だから全てを「スカタット登攀してくれ」と言っている、こんな60度くらいの雪壁にスタカットしてはもたつくばかりなのに・・・とブツブツ言っていると先行パーティがモタモタとしてなかなか降りて来ない。心中では「何してんねん？、早よ降りんかい！」と思っけていても「すみません、ハアハアゼエゼエ」の声を聞くと、「大丈夫かいな」と思っけてしまう。30分ほど待ってやっと我々の番がきたので半年ぶりのClimbingを思いだしてさっさと登攀したが、監視員はずっと双眼鏡で見ている。下りはスタカットピレーもじゃまくさいので持参のスリングとD環を2ピッチ残置して8環ですたこらさっさと降りてきた。White Bird はこんなことは山では日常茶飯事なので登攀道具は筆数項目で全くもって問題しないのだが、他人から強制されるのは遺憾である。

テン場から駒飼ノ池までの滑降を今日の最後と思っけていたのだが、宝剣から下ると時間も16時半になってしまったのでゆっくりと二人で雪

上晩餐会とはせ参じる。

夜中は放射冷却で冷え込み - 5°で肌寒かったが、空を見上げると満天の星空にもう夏の星座のミルキーウェイが走っていた。

4日 快晴 下山

宝剣キャンプ --- 木曾駒ヶ岳 ~ ~ ~ 中岳コル --- 中岳 ~ ~ ~ 駒飼ノ池 ---
 --- 宝剣キャンプ --- 和合山 ~ ~ ~ 駒飼ノ池 --- 和合山 ~ ~ ~ 千疊敷 ---
 極楽平 ~ ~ ~ 千疊敷



山頂より小股沢

朝方の冷え込みで外の雪はガチガチに凍っている。テント内も我々の息でバリバリに凍り付いている。コップルを持って雪解け水を汲みに行ってテント内へ持ち運ぶまでにその水は凍っている。気温は - 5°。

雪質は滑るにはまだまだガチガチだろうと思っけて、ピッケル&アイゼンで木曾駒ヶ岳へ向かうが、歩き出すと固さもさほどではないので、再びスキー板を取りに行き、山頂へと向かう。それにしても雪が少ない、山頂付近はほと

んどない状態である。

しかし山頂よりの大パノラマは北には御嶽山を筆頭に乗鞍、穂高連峰、後ろ立山までが見渡せて、東には南アルプス連峰、その後ろに富士山が、そして南には中央アルプス連峰の宝剣岳、三ノ沢岳、空木岳、南駒ヶ岳・・・と素晴らしい景色である。

山頂に板をデポして、久々に頂上木曾小屋のオヤジさんに会いに行く。相変わらずマイペースで元気そうであった。会うといつも言われるのが「加藤さんは元気にしていますか？」の返事である。ほんとに早く復活してほしいものである。昨夜はカメラマン1人と、山スキーヤーが3人泊まっていたそうだ。彼らはこの下の玉ノ窪小屋からの北斜面の玉ノ窪沢や南斜面の本谷沢を滑っていたようである。

木曾小屋から北へ延びる小股沢には雪がピッシリとついており滑降意欲をそそられる斜面である。これらは次回にとっておこう。

山頂2956 mから頂上山荘まで滑り込み、中岳2925 mへ登り返して駒飼ノ池まで滑りこんだ。

テン場へ登り返してテントを撤収。撤収していると、昨日北御所から入山して6合目付近にツェルトを張って伊那前岳を登ってきて今着いたという女の子2人組みが日焼けした顔で現れた。彼女たちは宝剣

岳へ登りたいと言うが、登攀道具を持参していないので無理だということとパトロールに掛け合いに行った。元気な女の子たちである。宝剣岳には朝早くからパトロール3人が手前でチェック体制をとっていた。

我々はフル装備で和合山へ向かった。和合山の北斜面はまだ白いキャンパスのままなので、せっかくなので二人のシュプールを残しておくことにする(^.^)。再び和合山に登り返して、今日のメインである千畳敷までの急斜面への滑降である。

昨日にルートは確認済みなのであるが、よく見ると先行者のシュプール跡があるではないか！、たぶん昨日頂上木曾小屋に泊まっていた山スキーヤーだろう。千畳敷カールはオットセイ岩まで板を担いで降りなければパトロールがうるさいので考える事は同じであろう。

「さぁ、それでは行きますかっ！」、40°くらいの斜面が千畳敷まで一直線に続いている、途中にハイマツが顔を出しているが問題なくクリアできる・・・アツという間に千畳敷のど真ん中まで降りてしまった。さすがに稜線から降りれば夏の日差しのようにTシャツ一枚になって千畳敷ホテルまで登り返す。

昨日よりも観光客がごった返して、我々の重装備姿を物珍しそうに写真を撮っている。



ホテル前にザックをデポして2年ぶりのリベンジである極楽平へとシール登行を開始する。ギャラリーが「あそこまで登るの?」「どれくらいかかるの?」などと、ごちゃごちゃうるさいのでほとんど無視状態で素通りである。

30分で稜線へたどり着き、最もホテル前から見やすい急な斜面にシュプールを描くことに決める。リベンジでもあるので少し離れた場所で大本にビデオ撮影をしてもらうことにした。

「さぁ、行きまっせ~(^.^)」、快適・快適、心はクラシック音楽にノリながらキャンパスにエッジで飛ばしたザラメを巻き散らせて最高の気分で一気にホテル前まで滑り込んだ。するとそれを見ていたギャラリーが拍手大喝采で迎えてくれた。こんな事は始めてなので照れくさかった(-_-;)。

これで今シーズンは心おきなく山スキーを締めくくることが出来ました(^.^)。この後は露天風呂こぶしの湯に浸かり宝剣岳を眺めながら、楽しかった思いでを胸にこめて体を癒した。

さぁ、後半GWは山スキー道具をメンテして、沢装備・Climbing 装備との衣換え、シーカヤック用具の出し入れなどに大忙しである。

